

シーナ & ロケッツ

Interview

鮎川 誠さん

バンドは音で勝負。そこさえブレなければいい、
全部ありのままでやろうと。それがロックやと思つとつたし。



「シーナ&ロケッツ」のバンマス・ギタリスト、鮎川誠さん。
デビューから35年以上を経て、なお熱いギターパフォーマンスで
支持を集める鮎川さんに、お話を伺いました。



『シーナの夢』(西日本新聞社刊)^{※1}を読ませていただいて、鮎川さんにとってもシーナさんにとっても、街との関係が音楽や人生に重要な影響を与えているのがわかりました。特にシーナさんの生まれ故郷、北九州市若松との関係は親密ですね

「僕とシーナは博多で出会って、最初の頃は、隣のアパートに誰がおるとか、親戚関係とか、そういうのはウザいとかね、二人だけでいいやん、と思ってたんです。それが、子供が生まれて、シーナの実家の若松で暮らすことになったら、街の人がみんな、そんな僕らのことを受け入れてくれてね。声をかけてくれるんですよ。“あんた、悦子ちゃん(シーナの本名)のダンナさんやろ〜”とかね。それが僕にとってはすごく新鮮で強烈で。東京での生活が始まるときに、若松のあの感じと同じやったらいいなと思ってたら、下北沢でも行きつけのたばこ屋さんとか、八百屋さんとか、肉屋さんとか、生活の中で出会う人たちが同じ感じで受け入れてくれて」

東京では最初から下北沢に住まわれたんですか？

「最初は、シーナと二人で淡島通り沿いの代沢十字路の先にアパートを借りました。な

んでこの場所を選んだかと言うと、エルボンレコードというところから出した最初のアルバムを録音したのが、赤坂のAMSスタジオで、そこから淡島通りまではタクシー一本で帰れるちゅうんで、便利だなというそれだけの理由。でも、70年代、福岡でサンハウスというバンドをやってたときにも、東京には“下北沢のジャニス”と呼ばれるヴォーカリスト(金子マリさん)がおる、なんていう話は聞いていて、下北沢ちゅうところはロックの拠点みたいな場所なんだろうというイメージはありました」

当時の下北沢は今ほどロックの街、という感じではなかったですね

「そうね、実際は、当時は飲み屋が多くて。ブルースバーとか、本屋の3階くらいにスーパーマーケットというライブハウスがあったり、本多劇場ができたり。ロックというよりは、演劇の街、という感じやったね。子供たちは最初の2年、若松に置いてきたんです。シーナの両親が、子供たちを預かってくれてね。二人で東京で勝負してこい、ってシーナのお父さんにお尻叩かれて出てきたので。二人だけで過ごした2年間は、ちょうどパンク、ニューウェーブという言葉が生まれて、その1年後には80年代の

※1 2015年2月に亡くなった、シーナ&ロケッツのヴォーカリストであり、鮎川氏の奥様、シーナへの愛を鮎川氏が語り尽した1冊

幕開けで、東京がすごくおもしろい時代だったんです。そんな時代に渋谷や新宿のアンダーグラウンドなシーンの友達もできて、クラブでは菊池武夫さんとか、ファッションの人たちとも出会えて、すごくよかったですね」

お子さんを若松に置いてきた2年の間で、一気に音楽活動を軌道に乗せたというのもすごいと思います

「僕たちはラッキーやったと思います。シーナが歌うようになって、まだ、シーナ&ロケッツという名前もついていないようなときの初めてのステージが、エルヴィス・コストロのオープニングアクト。6日間やったんです。そのステージを観に来ていた高橋幸宏さんがライブのあと話しかけてくれて。ユキヒロさんが僕らを細野晴臣さんに紹介してくれて、細野さんにレコードを作ってもらえることになって。まだアルファレコードからデビューしたばかりのYMOと一緒にレコードを作れることになったんです。その『真空パック』というアルバムのおかげで、テレビCMで曲を使ってもらったり、『夜のヒットスタジオ』で演奏できたり、ほんとにありがたいスタートでした」

お子さんたちはいつ東京に呼び寄せたんですか？

「上の子たちが小学校に上がるときに、若松からもぎ取るように(笑)、東京に連れてきて、下北で小さい一軒家を借りました。若松は、街も商店街も、みんなが大きなファミリーみたいになって子供たちを育ててくれたから、親の都合だけで東京に連れて行ってしまうのはすごく辛いことでしたけどね。でも、子供と一緒に暮らすようになって、街とはまたすごく近くなりました。PTAの友達とかもできて、私もロックが好きなのよ、なんていうお母さんの友達とかね。94年頃からは、犬も飼うようになって、また更に生活が変わりました。犬は規則正しいからね、毎日散歩に行かなきゃいけないし。今日も、さっき散歩に行ってきたところです。今の犬は小さいから、だいたい代沢十字路の1キロ圏内くらいが散歩エリアだね。最初の犬は、ムツゴロウ王国に行かせてもらったときに黒いラブラドルと出会って、譲ってもらったんです。そのとき、革ジャン着たバンド仲間が交代で抱いてたもんだから、下北に連れてきても……ほら、下北は革ジャン着たロッカーがいっぱいおるもんだから、犬もみんな友達と思ったみたいだね(笑)、すぐに馴染んで」



シーナと二人で過ごした
80年代の幕開け、
東京がすごくおもしろい時代だった

自由であることを受け入れてくれたのが この下北沢ちゅう街だったんです

金子ノブアキさん※2が、以前話していたのですが、彼が小学生のとき、学校の保護者による朝の交通安全の旗振り当番で、金子マリさんとシーナさんが向かい合わせて旗を振った日がある。シーナさんはロックQueenのような出で立ちのまま旗を振っていて、「すげえ街に住んでるんだな、俺」と思ったとか(笑)

「あの日は、シーナが3人目の子供の育休みたいない間を経て、ビクターから『ニューヒッピーズ』というアルバムを出してリスタートを切った日やったんです。“レコードの発売日に私は当番で旗振って、なんだか不思議”なんて言ってね(笑)。金子マリちゃん家のノブアキくんもKenKenも、うちの娘たちと同じ小学校だったからね」

シーナさんはロックQueenのイメージを崩さないまま、お母さん業もすごくちゃんとやってらしたんですね

「シーナの両親がそうだったから。だからシーナは毎朝、弁当も作ったし、PTAの集まりも授業参観も行ったしね。僕はニュー



ウェーブ時代はビジュアル的なのもいろいろのことなんかいっぱいやったけど、最終的にはバンドは音で勝負じゃけん、そこさえブレなければ、変にかっこつけたり、そこそそすることもないと思ってたんです。だから、結婚してることも子供がいることも全部ありのままでやろうと。家族のことを隠すなんて、全然考えなかった。それがロックやと思っとったし。僕の憧れのロックスターもみんなそうやって自由にやってるしね。その自由であるということを受け入れてくれたのが、この下北沢ちゅう街だったんです」

※2 金子マリさんとドラマーの故ジョニー吉長さんの長男。俳優・ミュージシャン。次男のKenKenはベーシスト

profile

鮎川 誠さん



福岡県久留米市生まれ。九州大学農学部卒。福岡を代表するバンド「サンハウス」のリードギタリスト・コンポーザーとして活動後、1978年「シーナ&ロケッツ」を結成。『涙のハイウェイ』でデビュー。81年には「SHEENA&THE ROKKETS」でアメリカデビューも果たす。アリーナクラスからライブハウスに至るまで、妥協なきステージングで繰り広げるライブアクトを中心に活動を続ける。18枚目の最新作「ROCKET RIDE」(SPEEDSTAR RECORDS)はロングセール中。昨年8月に『シーナの夢』(西日本新聞社)刊行。

取材・文／手塚美和 撮影／渡邊誠 撮影協力／トロワ・サンプル



SHEENA MEMORIAL #2

「シーナの命日に集まりたい」というファンのリクエストに応え、シーナさんの命日2/14(火)に、シーナ追悼の会「SHEENA MEMORIAL #2」を行います。シーナ&ロケッツのこれまでのライブから秘蔵ライブ等の上映を予定。

▶詳しくは <http://www.rokkets.com/>

開催概要

会場 下北沢にて開催予定
(詳細はオフィシャルHPにて近日発表)

主催 ROKKETDUCTION、
シーナ&ロケッツ

問い合わせ
info@rokketduction.com

鮎川誠 Presents 『シーナの日』#3 ～シーナに捧げるロックンロールの夜～

シーナを偲び、シーナが暮らし愛した下北沢で、“シー(4)ナ(7)”にちなんで今年も追悼ライブを開催します。1年目はチャー、金子マリ、仲井戸麗市ら多くのゲストを迎えて開催。昨年は伝説のサンハウスとシーナ&ロケッツで熱狂の2日ズを開催。3年目となる今年は、39年目に突入するシーナ&ロケッツと、鮎川誠&シーナの愛娘LUCYらをゲストに熱い2夜を繰り広げます。

日時 4/7(金)、4/8(土) Open 18:00/Start 19:00

会場 下北沢GARDEN(世田谷区北沢2-4-5)

出演 シーナ&ロケッツ、ゲスト・LUCY 他

料金 前売り5500円(別途ドリンク代500円)

主催・企画制作 ROKKETDUCTION

※先行発売はシーナ&ロケッツOfficial Ticket Centerにて <http://sheena.cc/ticket>
他、チケットぴあ、ローソン、e+でも取り扱い予定